

若手研究者コラムリレー

高尾 将幸 (たかお まさゆき)



プロフィール

東海大学体育学部体育学科 講師
日本体育学会の専門領域: 体育社会学

長崎県生まれ
2003年 筑波大学体育専門学群 卒業
2010年 筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科 単位取得退学

博士(体育科学)
東洋大学助教、東京理科大学助教を経て現職

E-mail: mt1212b@gmail.com



前列中央が筆者(卒論発表会にて)

わたしの研究

スポーツや身体の社会性を 多角的に考えてみたい

大学時代に受けたスポーツ社会学の授業は、それまで競技一辺倒でスポーツに取り組んできた私にとってとても刺激的でした。スポーツや身体の振舞いが、いかに時々の社会的な価値や規範と結びついているのか——まったく考えたこともない観点がそこにはありました。以来、身体をめぐる政治性について「健康」をキーワードとして研究に取り組んできました。はじめは価値観やイデオロギーの問題として「健康」を考えていましたが、徐々に視点は「健康」をめぐる形式的な語り(言説)が生み出す効果とその歴史性の方へとシフトしていきました。長い時間がかかりましたが、博士論文として仕上げる事ができたことは大きな財産になっています(下記の単著がそれが元になっています)。

また、スポーツ・メगाイベントに関する実証的研究も並行して行っています。1998年の長野オリンピックが地域社会にもたらした正負の遺産について、白馬村の事例から考察しました。現在は2019年に開催されたラグビーワールドカップの研究に取り組んでいます。対象地は岩手県釜石市です。震災復興を経て、同イベントが地域社会に何をもたらしているのか、また地域社会に住む人々がそれをどのように受容/活用しようとしているのかについて、ローカル・アイデンティティという概念を手掛かりに考察を進めています。

その他にも、育児戦略をめぐるスポーツの現代的な位置、フィジークなどの新しいボディメイクの実践、よりローカルなスポーツ・イベントのあり方にも関心があります。ゼミなどを通じて学生と一緒に調べて、考えたりしています。

わたしの渾身の論文・書籍・記事

高尾将幸(2014)「健康」語りと日本社会—リスクと責任のポリテクス—、新評論。(単著)

必読

新しい社会のモデルに

2019年、ラグビーワールドカップが日本(アジア)で初めて開催されました。5歳からラグビーをプレーしてきた私にとって、とても感慨深い出来事でした。1995年の第3回ワールドカップ、ラグビー日本代表はニュージーランドに145-17というスコアで歴史的な大敗を喫します。当時、私は中学生で、一生懸命にラグビーに打ち込んでいましたが、その試合をテレビで見た時の惨めさは今でも忘れられません。

月日は流れ、ラグビー日本代表は大きく生まれ変わりました。特に目を見張るのが、海外出身の選手たちと日本出身選手たちの関係です。ラグビーは代表資格について所属協会主義をとるため、その地で3年以上居住 & プレーすれば代表になる権利を得ます。これは大英帝国の各植民地が対抗戦を行っていたことに端を発しています。単一民族的ナショナリズムが強い日本では、なかなかこれが理解されてきませんでした。そうしたなか、代表キャプテンのリーチ・マイケル選手(東海大出身)は、日本の歴史や文化を勉強しなおし、それをチームメイトに伝えることで、代表選手としての誇りを持ってもらう努力をしたそうです。

多様なバックグラウンドを持つ人々が、その地の伝統に敬意を示しつつ、互いの自由をも尊重できる社会——今回のワールドカップで、新しい日本社会のモデルが垣間見えた気がしています。

○次回のコラムリレーは体育心理学の「中須賀巧」さんを予定しています。

日本体育学会若手の会からのお知らせ

2018年8月に日本体育学会若手の会が発足しました！
→メンバーリスト登録フォーム:

<https://goo.gl/forms/zGMPdPa5fY3kcB5q2>

学会大会、研究会等の開催や報告者募集に関する案内、公募や助成金情報等に関する情報提供を配信予定です。皆様からも、メンバーリストで周知したい情報がありましたら、下記までご連絡ください。

taikugakkaiwakate@gmail.com (担当: 木村)

